原　著

1922（大正 11）年文部省主催運動体育展覧会の体育・スポーツ史的意義に関する研究

橋　本　美　湖（株式会社札幌ドーム）*

A study on the historical significance of the exhibition of sports and physical education under the auspices of the Ministry of Education in 1922

Miko Hashimoto（SAPPORO DOME Co.,Ltd.）*

（2017 年 3 月 31 日受理）

Abstract

This study is intended to consider the significance of the exhibition of sports and physical education held in 1922.

At first, the exhibition was re-constituted by investigating exhibitors, exhibits, attached events, etc.. Then they were classified and considered from six viewpoints, the West, military affairs, the Imperial Household, women, Industry, and science.

In conclusion, it can be said that the exhibits and attached events showed the historical tendency of the following time, and therefore the exhibition is a very important material in the historical study of physical education and sports of Japan.

キーワード：大正期　　体育・スポーツ史　　展覧会
Key Words: Taisho period　　history of sports and physical education　　exhibition

Ⅰ．緒　言

運動体育展覧会は、1922(大正 11)年 4 月 30 日から 31 日の間、東京博物館(現、国立科学博物館)において開催された。これは体育・スポーツにのみ焦点を当てた日本で最初の展覧会であり、1 日あたり約 5,000 人もの来場者を得るに至ったという [1)]。

運動体育展覧会の開催された大正期は、第一次世界大戦を経験し、本格的政党内閣の成立、民主主義の模索、平和主義の台頭、科学技術の発展、新しい生活スタイルの確立など、その後の暗い歴史を顧みたとき、つかの間の晴れ間のようである。しかしながら、既に太平洋戦争への胎動が始まっており、国際関係の複雑さが、社会や文化に反映した時代とも言い得る。その例に漏れず、体育・スポーツに関わる人々の立場やその目的は多様化していた。そのために一元的な解釈を不可能にし、大正期の体育・スポーツ史は、「最も解釈の困難な種々の課題を残している」と評されている [2)]。しかし、安易な憶測は避けなければならないものの、わずか 15 年足らずの大正期の体育・スポーツの様相が混沌としているという事実は、現代を体験する我々に、ある期待を抱かせる。我々の目には、それ以後の体育・スポーツの歴史が形作られる上で太い幹となる新芽をあちらこちらに芽吹かせていたとも映るのである。

本研究は、この青々とした新芽に視線を投げかけつつ、これまで研究の中心に据えられることのなかった運動体育展覧会を真正面から捉え [3)]、大正期の体育・スポーツ史研究に残された「課題」に取り組もうとする試みである。運動体育展覧会は巨大な情報伝達装置の一つであり、これが伝えようとする情報には、大正期の体育・

スポーツの様相を知る上での重要な手がかりを含み得ると考えるからである。まずは、残された資料を利用して、運動体育展覧会を再構築する必要がある。そして、その後の体育・スポーツの展開を踏まえ、運動体育展覧会の体育・スポーツ史的意義の検証を行う。従って本研究は、大正期の体育・スポーツ史研究の基礎研究に位置づけられ、これに貢献するものと考える。

Ⅱ．運動体育展覧会の全体像

（1）展覧会開催の意図

1922（大正 11）年 1 月、東京博物館では、次年度の最初を飾る特別展覧会のテーマを絞り込んでいた。思想問題、婦人問題、運動問題の 3 つが最終的な候補として残され、その中で、運動問題への関心が最も高まっていたという [4]。これは、運動が国民の生活を改善するに科学的根拠を持ち得ると官民両者から認知されたことを意味していた。なぜなら、1916 年、「虎列拉病予防通俗展覧会」に始まる東京博物館の特別展覧会という一連の企画は、国際社会における日本人の地位や資質を向上するための、いわば科学知識啓蒙の場として、政府の教育普及政策の一翼を担い、しかも、新しい時代に即した生活スタイルを求める国民の知的欲求に合理的かつ科学的に応える企画であったからである。

「一般家庭へ體育宣傳の為に　今春四月に展覧會を開催　理論と實際を説明」と題し、運動体育展覧会の開催決定が報じられたのは、1922（大正 11）年 1 月 23 日のことである [5]。主催は東京博物館を直轄する文部省であった。文部省では、既に 1919 年、臨時教育会議諮問第 8 号答申において、社会教育としての体育を重視するという姿勢を明確にしていた。運動体育展覧会の決定は、文部省の政策上必然性を持っていたのである。そして、彼らの運動体育展覧会に寄せる期待は、展覧会の趣旨に表れることとなる。

現時我ガ國民カ一般ニ人心ノ緊張ヲ缺キ健康状態ニ将タ活動能率ニ於テ歐米國民ニ及ハヌ點カ多イノハ洵ニ痛歎ノ至リニ堪ヘマセヌ之レ畢竟我ガ國民カ長イ間世界競争ノ圏外ニ在ツテ不知不識遊惰ニ流レ運動不精ノ悪風ヲ馴致シタノト衛生思想ニ乏シカツタ為メテアルト信シマス此ノ弊風ヲ打破シ此ノ頽勢ヲ挽回スルニハ國民ニ運動體育ノ必要ヲ鼓吹シ積極的ニ身體ヲ鍛錬スルノ風ヲ盛ナラシムルコトガ最モ急務テアルト思ヒマス今回本省カ運動體育ニ關スル参考品ヲ蒐集陳列シテ世人ノ歎覧ニ供シ聊カ此ノ方面ニ於ケル民衆教化ニ資セントスルニ至リマシタ次第デアリマス [6]

欧米に比べ、劣っている健康状態と活動能率の原因を運動無精の悪風と衛生思想への知識不足とみなし、その対策の一つとして、この運動体育展覧会があると説明している。展覧会において運動体育の必要を鼓舞し、身体を鍛える風潮を養うことを目的としたのである。

（2）協賛会の事業とその役割

①協賛会の発足

文部省主催運動体育展覧会の開催決定と趣旨の発布を受け、東京博物館ではまず、日本における体育・スポーツ界のエキスパートたちに声をかけた。実際の運営、具体的な展覧会の計画を行う展覧会協賛会の発足を狙ったのである [7]。

「文部省主催運動體育展覧會ノ事務ヲ協賛シ且ツ觀覧者ノ便宜ヲ圖」ることを目的に運動体育展覧会協賛会は発足した [8]。この協賛会の中で実際の事務を掌握し、運営の円滑化を図る理事は、東京運動具製造販売業組合の役員で占められている。展覧会の前年の 1921 年に発足した東京運動具製造販売業組合にとって、この企画は、組合の存在を知らしめる絶好の機会であり、まさに「記念すべき有力事業」であった [9]。また、「重要事項ノ協議ニ参與ス」ことを求められた評議員には、当時の体育・スポーツの権威者たちがずらりと揃っている。慶應大学体育部理事の板倉卓造、早稲田大学教授の安部磯雄といった大学関係者、九州帝国大学教授医学博士の桜井恒次郎をはじめとした研究者、東京女子体操音楽学校長の藤村トヨ、講道館長の嘉納治五郎、陸軍戸山学校長の菱刈隆、内務省衛生局長といった体育・スポーツに関するあらゆる分野の第一人者の名前が見られる。また、参議院議員、貴族院議員、東京府知事、その他帝国ホテル支配人、銀行取締役など並々ならぬメンバーを揃えている。そして彼らの上には、東京市議会長であった桐島像一が立ち、会長として任務を全うし、顧問として東京博物館の棚橋源太郎と文部省社会教育長の乗杉嘉壽の 2 名が全体を監督した。

②協賛会の予算

まず、運動体育展覧会の事業に必要となってくるのは、資金である。東京博物館は、特別展覧会の入場料を徴収しておらず [10]、また映画や講演会についても同様であった [11]。故に協賛会が算出した予算「金六千四百圓」[12]の捻出は、協賛会の運営手腕が問われるところであった。協賛会では、収入の半額を自身の寄附金及びその醵出金によって、残りの半額を附帯事業入場料と売店売上歩合金として賄った。主な収入源は、協賛会の理事である東京運動具製造販売業組合員の商品の販売だったと推測される。また、会期中に東京府市場協会経営の下、日用品の正価

廉売をも行っており[13]、その歩合金の獲得も行われたと考えられる。後に組合の15年史を編纂することとなる玉澤バット商会の玉澤敬三は、協賛会が行った附帯事業を列挙した上で、最後に即売を記し、「未曾有の成功を収め得た」と綴っている[14]。

③出品の呼びかけ

協賛会は、協賛会員個人及び所属団体からの出品を画策し、その収集に努めた。協賛会役員の個人名での出品を行っている者が、72 人中、17名であり、役員の所属機関の出品は、22団体を数える。つまり、協賛会の半数が出品に関わっていることになる。その出品数も他と比較にならないほど多く、展覧会の運営だけでなく、展示物の充実にも協賛会は大きな役割を果たしていたと言える。そして同時に他の関係諸機関並に各都府県に広く出品の依頼を行うことも怠ることはなかった。開催決定の翌月に各関係者へ出品の勧誘状を発送したのである[15]。文部省という中央政府機関主催の展覧会であるから、同省から自治体へ、各自治体から学校などの諸団体や個人へと出品依頼の伝達が行われた。しかも、このような勧誘は、併合後の朝鮮へも及んでいる。さらには文部省と同じく衛生に関する部署のある内務省や皇室の文物を管理する宮内省へも出品を促したのだった。

協賛会の運動体育展覧会にかける意気込みは、附帯事業への積極的な関与にも表れている。東京博物館は全ての特別展覧会において講演会と映画会を企画し、これを附帯事業としていたが、協賛会はこれに加えて、実演という項目を設けている。用具や体操の実演を依頼し、また各種競技大会の実施を呼びかけたのである。

④広報活動

展覧会の準備が整い、入場者を待つばかりとなった協賛会は、報道各機関に積極的に働きかけた。当然ながら、協賛会に参加する諸団体の機関誌を利用した広報活動が行われた。また、教育関係の雑誌にも情報の提供が行われている。その他、当時発刊していた体育・スポーツや衛生に関係する雑誌にも意欲的な情報の提供を行っている。もちろん、体育・スポーツに普段あまり関心のない人々へ広く開催を伝えることが可能な一般紙の取材にも格別な配慮を行っている。ここで、彼ら協賛会が特に力を入れて広報した事柄は、女性の運動と皇室の出品、そして運動具の廉価販売であった。「女には是非見せたい」[16]、「摂政宮も御出陳」、「體育展覽會開催中に限り大特價」[17]の文字が新聞各紙に躍ったのである。

展示物は多種多様であり、著名人の出品もあり、女性の運動体育も展示され、その上映画や競技会も見ることができる。皇室のお墨付きもあり、教育を司る文部省による主催であるから展覧会を一目見ると科学的な思想も身に付く。しかも運動具商が絡んでいるようだから消費者としても得をしそうだ。読者がこのように想像したのであれば協賛会の思惑どおりであっただろう。

⑤展覧会の開幕と接待

展覧会の準備を大車輪で進めた協賛会は、開催直前の29日に関係者を展覧会に招待するという、現在でいうオープニングセレモニーを予定していた[18]。そこには、貴族院及び衆議院の両議員やその他体育・スポーツに関して当時第一線を行く人物たちが揃い、その数は、2,000人にも及んだ[19]。

そして開幕のための準備をすべて整えた協賛会は、ついに4月30日を迎えることとなる。この日、午前 8 時という開催直後に淳宮の行啓を得、協賛会一同が待望した皇室のお出ましが早くも実現することとなる[20]。さらに5月8日、スポーツ好きで知られる皇太子の行啓が行われたのである。摂政宮に就任したての皇太子の行啓は、事業成功の証であるかのように協賛会関係者の記録に残されている[21]。そして大正15年5月30日、大正時代の東京博物館における20の特別展覧会の中で、第 4 位にあたる入場者数168,284人という数字を獲得するに至った。

（３）展示物及び附帯事業

運動体育展覧会の展示物と付帯事業の全容が記された資料はない。東京博物館の年報『東京博物館一覧』(東京博物館,1924)及び内外教育資料調査会『教材集録　運動體育誌上展覧會』（南光社,1922）からおおよその展示物を知ることができるが、全てを明らかにすることはできない。そこで、資料的な限界は生じるものの、新聞、出品者である競技団体発行の機関誌、体育・スポーツ雑誌、教育関係の雑誌を利用し、展示物及び付帯事業を明らかにしようと試みた。

協賛会は運動体育展覧会における展示物を 7 つに分類し展示を行った。当時設定された分類及び明らかにすることのできた展示物数は、次の通りである。

① 皇室関係の出品
　出品者 3　展示物数 42
② 本邦古来の運動体育参考品
　出品者 32　展示物数 260
③ 登山遠足旅行参考品
　出品者 9　展示物数 113
④ 水陸各種競技参考品
　出品者 46　展示物数 349
⑤ 体操遊戯強健法等参考品
　出品者 49　展示物数 131

⑥ 体育的作業娯楽及体育上の統計類
出品者 18　展示物数 87
⑦ 運動体育に関する用品服装類
出品者 47　展示物数不明 [22]

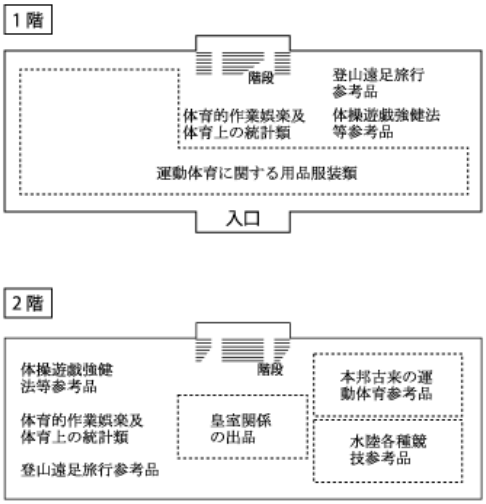

図１．運動体育展覧会配置図（橋本、2017）

（注 東京大正博覧会事務局『東京大正博覧会事務局報告上巻』1914 掲出の東京博物館平面図を参照し、内外教育資料調査會『教材集録　運動體育誌上展覧会』南光社、1922 の資料の記述により、橋本が作図した。）

以上 7 つの分類に従い、図のように展示配置が決定したと推測される。まず、正面玄関を入ると、豪華に飾られた美満津商店の陳列棚があり、中でもラケットを握らせ、テニスウエアを着けた西洋婦人のマネキンが一際目を惹き、入場者を驚かせる [23]。1 階部分は、美満津に代表されるように、分類でいう運動体育に関する用品服装類、つまり東京運動具製造販売業組合を中心とした企業の出品物が正面玄関から入って左側全面と右側の一部を占める [24]。電鉄の 1 日旅行の案内や軍隊の野営道具を含む登山遠足旅行参考品 [25]、学校における体育の様子を伝える写真や帝国劇場でのセーラーダンスの模型などを目玉にした体操遊戯強健法等参考品 [26]は一階右側手前部分へ配置される。その奥、階段附近の位置には、體育的作業娯楽及體育場の統計類 [27]が置かれることとなる [28]。入場者は、当時日本で手に入る最新の運動用具と学校体育や遊技の現状を垣間見、2 階への階段を上がることとなる。2 階へ上がる右手の階段の壁面には [29]、「本邦人の運動無精」と称した不精者と活発な者とを比較した絵図が掲示され、運動の必要性が分かりやすく示される [30]。こうして運動無精への注意を促された入場者は、明治大正両天皇をはじめ、摂政宮に就任したばかりの皇太子、皇后の陳列棚に圧倒される。2 階左側に、明治大正両天皇が幼少時代に使用したという木馬、皇太子のスポーツ活動の写真などを目にするのである [31]。菊の御紋で飾られた展示ケースを後に、左回りに会場を歩くと、「柔道、剣道、相撲の如き我國固有の武術なり國技なり」を目にし、そしてその後すぐに「明治から大正にかけて外國から移入し来たつた運動競技の類」に関する展示物が見ることができるように配置された [32]。分類でいう本邦古来の運動体育参考品と水陸各種競技参考品を比較して見せることが意図されている。さらに 1 階には展示できなかった登山遠足旅行参考品、体操遊戯強健法等参考品及び體育的作業娯楽及體育場の統計類の一部が置かれている [33]。そして、2 階から降りる階段には、海軍省医務局による統計図が配置されたのである [34]。

以上のような博物館内への展示の他に、協賛会は附帯事業として競技会、毎日曜日に婦人デー、子供デーを設定して実演を催すなどした。静的な展示と動的な実演、理解をより深める講演会、最新機器を使用した映画会、当時考えられ得るあらゆる手段を駆使して、体育・スポーツの魅力が伝えられることとなった。

Ⅲ．運動体育展覧会の展示物及び附帯事業の分類

上記のとおり、展覧会の全体像を明らかにしていく過程を経て、本研究の目的である運動体育展覧会の体育・スポーツ史的意義を考察するために、運動体育展覧会を多角的に評価し、特徴づける視点として、欧米、軍事、皇室、女性、産業、科学という 6 つの項目を設けた。そしてこの項目に基づいて展示物及び附帯事業を分類し、さらにそれぞれの分類項目をその内容に従って細分した。

（1）欧米

運動体育展覧会には、欧米の体育・スポーツに関する写真や用具が数多く出品された。また日本との比較が盛んに示されているが、欧米の優位を主張するものが多い中、一部その逆が主張されることもあった（表 1）。

表1　欧米に関する展示物及び附帯事業

欧米と日本の比較	19
欧米の体育・スポーツの現状	138
用具	15
欧米の日本への関心と日本人の活躍	11
その他	19

（2）軍事

軍隊の出品物からは、軍事的目的に従った研究と実践の関係が確立されていることを見て取

れる。これに賛同する者も多く、国防と体育・スポーツの関係を示す展示物は、軍隊以外からも出品されている（表 2）。

表2　軍事に関する展示物及び附帯事業	
軍隊による運動体育展覧会への参加	73
軍事的意図を持った展示物及び附帯事業	9
その他	9

（3）皇室

皇室内で、盛んに体育・スポーツが嗜好され、中でも若い世代は洋式スポーツを好んでいることが窺える。また台覧を受けた競技団体から、映像や写真の提供もなされた（表 3）。

表3　皇室に関する展示物及び附帯事業	
在来スポーツ	23
洋式スポーツ	20
体操	3
台覧の記録	4

（4）女性

内外の女性の体育・スポーツに関する展示物が集められ、その数は全体の 1 割に達した。また婦人デーが 2 日間催され、第 1 回女子連合競技大会が催されるなど、女性の体育・スポーツ実践への参加者が目立った（表 4）。

表4　女性に関する展示物及び附帯事業	
日本における女性の体育・スポーツの現状	85
欧米における女性の体育・スポーツの現状	20
女性の体育・スポーツの奨励	22
その他	6

（5）産業

運動体育展覧会で紹介されたほとんどの種目に対応する用具が出品された。これを供給する運動具製造販売業者は、広告出品として商品を陳列するだけでなく、体育・スポーツに関わる多様な出品を行った（表 5）。

表5　産業に関する展示物及び附帯事業	
運動具製造販売業者による出品	51
用具	177
その他	17

（6）科学

運動生理学と公衆衛生学の二つの科学に基づく出品物が数多く見られた（表 6）。

表6　科学に関する展示物及び附帯事業	
姿勢と動き	38
生理・解剖学	25
公衆衛生	200

Ⅲ．運動体育展覧会の展示物及び附帯事業に関する考察

上記Ⅱ．における分類に従って、次のように考察を行った。

（1）欧米への意識

展覧会の趣旨からも明らかなように、文部省の認識における欧米への劣等感は危機感に等しい。しかしながら、展覧会の参加者全てが、同じ認識を持っていたわけではない。展示物中には、世界で活躍する日本人の姿や、イギリスで日本の柔道が浸透しつつあることを示す図書や写真も見られ、日本が劣っているという意識ばかりが蔓延していたのではなかった。むしろ、欧米に近づきつつある、もしくはある面では欧米よりも優れている、と信じている者さえも存在したのである。

このように、欧米に対する共通な意識を持ち得てはいないものの、欧米を比較の対象として捉える意識を皆一様に所有していたことに疑いの余地はない。軍事的、あるいは経済的に、あらゆる面において日本が欧米諸国と対等であるべきだという認識が確かに底辺に存在し、体育・スポーツにおける日本の成長の度合いは、常に欧米との相対的な比較によって測定されていた。そして欧米に基準を与え、展示物として選択することで、目指すべき日本の体育・スポーツの有り様を欧米の姿を通じて視覚化することが可能となった。欧米の現状を展覧会の場に提示することで、理想的な日本の将来が観賞者に対して示されたのである。

（2）軍事的意図

運動体育展覧会が開催された大正後期は、2 つの世界大戦の狭間に位置し、故にその前後の混乱と比較して、平和が意識された時代であったといってよい。だからこそ陸軍の出品物を「滑稽」であると批判することまでが許されていた[35)]。一方で、軍人を体育・スポーツの模範生と見なす声も少なくなかった。確かに戸山学校の出品物からは、運動と身体の関係を科学的に研究し、得られた結果に基づいて体操やスポーツを実践する様を窺い知ることができる。さらに彼らは、徴兵検査の結果を蓄積して日本の現状を充分に把握すると同時に、国民全体の体力を向上させるための体操や日常生活のあり方さえ提案している。研究と実践のみごとな融合による戸山学校の出品とそれを評価する姿勢、軍隊以外からの国防を目的とした体育・スポーツへの支持を確認できる。故に運動体育展覧会が軍事的目的に従って体育・スポーツを促進する手段の 1 つとしての機能を持ったのではないかとの推測を可能にする。

（3）皇室と洋式スポーツの接近

皇室からの出品は、運動体育展覧会の関係者

にとって、極めて重要な事項であった。各報道機関もこの事実を大々的に報じた。皇室が参加することによって運動体育展覧会の社会的価値が高められたのである。展覧会場に皇太子が訪れたという事実もまた同様である。台覧されることの価値は、体育・スポーツの世界でも充分に浸透していたのである。展覧会で上映された映画 22 本の内の 3 本は台覧試合を撮影したものであった[36]。

運動体育展覧会において、この栄誉ある行為に最も貢献しているのが皇太子であることは、その出品物の数と質、行啓の事実からも明らかである。大正天皇が日本古来の用具を出品したのに対し、皇太子は、洋式スポーツに関する出品を大々的に行い、展覧会場を飾った。当時は、世界的に君主制の危機が訪れ、大正天皇も病気がちで明るい話題に乏しく、皇室の制度そのものの強化が声高に叫ばれていた。そこで、皇太子に次代の皇室を託すための戦略として洋式スポーツが選択された。それは、活動的で親しみやすく、かつ国民の見本としての威厳を保つ皇室の姿を代弁するものであった。

運動体育展覧会において皇室は、スポーツの擁護者、愛好者として、観賞者の目の前に数多くの用具や写真を示した。ただしそこでは、在来スポーツと洋式スポーツが、新旧それぞれの時代を象徴し、大正天皇とその皇太子の間に大きな隔たりを見せていたのである。

（４）女性スポーツの台頭

運動体育展覧会の会場は、海外や国内の女性が如何に熱心に体育・スポーツ活動に参加しているのかを示す展示物によって彩りが添えられていた。陸軍、文部省、東京博物館、そして教育機関と出品者は多岐に渡り女性の体育・スポーツをもり立てた。展示物もさることながら、二度に渡って実施された婦人デーにおける実演や競技会も注目を集めた。

主催者である東京博物館は女性の体育・スポーツ活動の改善に大きく力を入れ、展覧会への参加を強く呼びかけている。なぜなら、大正期以降、博覧会や展覧会は、国民生活を支える最小の社会単位としての家庭、その要である女性に対し、展覧会の入場者として目を向けていったからである。そして女性の側もそれに応えるだけの余裕を獲得し始めていた。展覧会をつくる側は、女性を強調することを定石とし、故にテーマと女性との関係を親密なものとしたのであった。

このような時流の後押しも受けて、運動体育展覧会における女性へのまなざしが熱を帯びるに至る。展覧会の作り手、体育・スポーツに携わる教育機関や競技団体、個人、そしてマスコミ、さらには社会全体が運動体育展覧会を通じて女性と体育・スポーツの距離を縮めようとしたのであった。

（５）スポーツ産業界の活況

運動体育展覧会の展示物の内、多くの出品者が用具を出品できた背景には、製造や下請け、輸入などの手段によって、用具を受容する者へ供給する人々の存在がある。運動体育展覧会において、東京運動具製造販売業組合の活躍は、そのまま当時の体育・スポーツ産業界の活況にも置き換えられると言えよう。彼らは、協賛会が設定した分類の一つ、「運動体育に関する用品服装類」に出品を行っている。彼らの展示スペースは、博物館の一階のほとんどを占めた。このような待遇は、運営に尽力したという理由だけで、処されるものではあるまい。なぜなら、展覧会運営に関わる重要事項は、協賛会の評議員に名を連ねる体育・スポーツ界の重鎮たちによって審議されるからである[37]。それにも関わらず、注目を集める位置を勝ち得たことは組合への評価の高さを示している。また注目すべきは、彼らが「運動体育に関する用品服装類」以外にも、積極的に出品協力したという事実である。それは、商品を販売することだけでなく、体育・スポーツそのものを活性化させることを充分に理解していた証拠でもある。

その後の東京運動具製造販売業組合は、各方面からの依頼を受けて、1927（昭和 2）年の第 4 回の体育デー[38]や 1938（昭和 6）年の体育展覧会[39]に参加するなど、体育・スポーツの促進を目的としたイベントにも賛同している。そこで彼らは、積極的な経済的、人的支援を行った。運動体育展覧会は、産業界の影響力を広く認めさせると同時に、産業界に、体育・スポーツのイベントに貢献の場を得ることを覚えさせ、その後のスポーツ産業のあり方に一つの指針を与える契機となったのであった。

（６）科学的研究とその実践

Ⅰで述べた通り、1922 年当時、科学的な知識によって国民の生活を改善させよう、もしくは改善しようという試みは、官民両者の意識にあった。

運動体育展覧会の展示物中には、公衆衛生学に基づいた統計資料や体操の実践が数多く提示された。その一方で、観賞者に対して可視化された動きの仕組みが、科学的に解説されたものも多く展示された。一つ一つの動きに意味を持たせ、科学に裏打ちされた身体活動のあり方が提示されたのである。ただし、展覧会に見られるこれら運動生理学の成果は、公衆衛生的な運動の効果を証明することに終始し、あくまで健康的な生活をおくるための科学として紹介され

ているのである。しかしながら運動生理学は、競技力向上のための基礎を確かに築いており、運動体育展覧会は、運動生理学と公衆衛生学という二つの科学に裏打ちされた体育・スポーツを広く国民に知らしめる有益な機会となったといえる。

結論 運動体育展覧会の体育・スポーツ史的意義

Ⅲの考察の通り、運動体育展覧会において体育・スポーツは欧米、軍事、皇室、女性、産業、科学の諸要素を消化し、吸収し、観賞者へとその関係の密接な様を伝達した。展覧会を特徴づけるこれら６つの視点は、大正期の体育・スポーツの様相をも特徴づけるものと言い得る。その意味でこの展覧会は、大正期の体育・スポーツが次の時代へと指針を決定するための貴重な体験となった。その体験の場を提供し、大正期の体育・スポーツを方向付けたことこそ、運動体育展覧会の体育・スポーツ史的意義であったということができよう。

【註及び文献】

1) 東京博物館『東京博物館一覧　大正十五年』1924、p.17
2) 岸野雄三、竹之下休蔵(1983)『近代日本学校体育史』日本図書センター、p.126
3) 運動体育展覧会を直接の研究対象として取り扱っている先行研究はない。しかしながら、次の五つの研究の中で紹介されている。
①真行寺朗生、吉原藤助『近代日本体育史』（日本体育学会、1928）
②水野忠文、木下秀明、渡辺融、木村吉次『体育史概説―西洋・日本―』（杏林書院、1966)
③木下秀明『スポーツの近代日本史』（杏林書院、1970）
④高津勝『日本近代スポーツ史の底流』（創文企画、1994）
⑤坂上康博『権力装置としてのスポーツ』（講談社、1998）
4)「今度は運動體育展覧會」『教育時論』1324号、1922年1月25日、p.35
5)「一般家庭へ體育宣傳の為に　今春四月に展覧會を開催　理論と實際を説明」『東京朝日新聞』1922年1月23日、p.4
6) 東京博物館編『東京博物館一覧　大正十二年』1924、p.17
7) 東京博物館の役員は、館長の棚橋源太郎の下に、経理課4人、陳列課4人、そして特別展覧会の職務にあたる附帯事業課5人の計14人で構成されている。様々なテーマで年間に3本程度の特別展覧会を行うにあたり、運営費用及び専門知識の獲得、適切な展示物の選定などを、これだけの人員でまかなうことは困難であった。そこで、棚橋は、展覧会事業を円滑に進めるために、民間有志による組織化、即ち協賛会の発足を進めたのである。
8) 玉澤敬三編『東京運動具製造販売業組合史』東京運動具製造販売業組合、1935、第二篇pp.40-42には「運動體育展覧會協賛會規則」の全文が載せられている。
9) 同上書、p.55
10) 東京博物館『東京博物館一覧　大正十二年』1924、pp.8-9
11)「今度は運動體育展覧會」『教育時論』1324号、1922年1月25日、p.35
12) 前掲書、玉澤敬三編『東京運動具製造販売業組合史』第二篇、p.42
13) 東京博物館『東京博物館一覧　大正十二年』1924、p.17
14) 前掲書、玉澤敬三編『東京運動具製造販売業組合史』第二篇、p.54
15) 大日本学校衛生協会『日本学校衛生』第10巻第2号、1922年2月21日、p.223
16)「新紀元を作る　運動展　一廻りで通になれる　野育から科學的に　『女には是非見せたい』と棚橋館長語る」『東京朝日新聞』1922年4月29日、p.5
17)「祝文部省主催運動體育展覧會　運動體育展覧會に摂政宮も御出陳　来る卅日から御茶の水東京博物館に於て開催　婦人の實演も行はれる」『読売新聞』1922年4月30日、p.10
18)「陛下御幼時の木馬も列んで　太刀や木劍からバツト迄　運動方面の珍品を網羅　卅日から開かれる運動體育展覧會」『東京日日新聞』1922年4月28日、p.9
19)「新紀元を作る　運動展　一廻りで通になれる　野育から科學的に　『女には是非見せたい』と棚橋館長語る」『朝日新聞』1922年4月29日、p.5
20)「熊谷氏を召して　また庭球競技を御覧　来月六日新宿御苑コートに」『東京日日新聞』1922年4月30日号、p.9
21)「巻頭言」『アスレチックス』1922年6月号、p.1
22) 東京運動具製造販売業組合の製品が出品されたが、広告的な役割を有したためか、他の分留に比較し、極端に資料掲載が少なく、不明とした。
23) 関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2巻6号、1922年6月1日、pp.85-86、佐々木等「文部省主催體育展覧會概觀」『體育と競技』7号、1922年、p.173
24) 佐々木等「文部省主催體育展覧會概觀」『體育と競技』7号、1922、p.173
25)「軍人が野榮時に用ふる器具とか、糧食」（彌

之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1335 号、1922 年 5 月 15 日、p.25）、「鐵道省の『東京附近一泊旅行案内』京王電車の『玉川電車の一日の行遊』」（関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.85-86）が報告されている。

26)「各學校の體育的訓練の寫眞及びその統計等」（彌之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1335 号、1922 年 5 月 15 日号、p.25）及び「帝劇模型のセーラーダンス」（関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.85-86）が報告されている。

27)「福澤諭吉翁が身體を練つたと云ふ同家秘藏の立臼と杵」（「新紀元を作る　運動展　一廻りで通になれる　野育から科學的に　『女には是非見せたい』と棚橋館長語る」『東京朝日新聞』1922 年 4 月 29 日、p.5）及び「日本古来の樂器で尺八など」（彌之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1922 年 5 月 15 日号、p.25）が報告されている。

28) 階段途中に掲示されていたという比較絵図（関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.85-86）は、體育的作業娯楽及體育場の統計類に属しており、階段付近に展示されたと推測できる。

29) 内外教育資料調査會『教材集録　運動體育誌上展覧会』南光社、1922 に掲載された写真には、摂政宮が階段を下りる様と階段左部分がわずかに写っているが、それは各種の記事に階段登りに展示されていたという「本邦人の運動無精」ではなく、海軍省医務局出品の「海軍志願兵身體檢査合格者身長累年比較表」もしくは「海軍志願兵身體檢査合格者體重累年比較表」のどちらかだと考えられる。従って、階段の正面玄関から入って右は登り、左は下りと区別していたと考えられる。

30)「『本邦人の運動無精』の實例」（関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.85-86）が報告されている。

31) 関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.85-86、佐々木等「文部省主催體育展覽會概觀」『體育と競技』7 号、p.173、「新紀元を作る　運動展　一廻りで通になれる　野育から科學的に　『女には是非見せたい』と棚橋館長語る」『東京朝日新聞』1922 年 4 月 29 日、p.5、「陛下御幼時の木馬も列んで　太刀や木劍からバツト迄　運動方面の珍品を網羅　卅日から開かれる運動體育展覽會」『東京日日新聞』1922 年 4 月 28 日、p.9 が皇室の出品が二階部分にあったと報告している。

32) 彌之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1335 号、1922 年 5 月 15 日、p.25

33)「種々な統計や面白い陳列」（彌之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1335 号、1922 年 5 月 15 日、p.25）、「槇有恒氏のアルプス登山用具の出品」、「戸山學校の手拭體操」（関斗庵「達磨の運動體育展のぞ記」『社会と教化』2 巻 6 号、1922 年 6 月 1 日、pp.86）が報告されている。

34) 前掲書、玉澤敬三編『東京運動具製造販売業組合史』第二篇 p.42

35) 彌之介「運動體育展覽會雑感」『教育時論』1335 号、1922 年 5 月 15 日、p.25

36) 内外教育資料調査會『教材集録　運動體育誌上展覧会』南光社、1922、pp.443-445

37) 前掲書、玉澤敬三編『東京運動具製造販売業組合史』第二編 p.41

38) 同上書、pp.127-135

39) 同上書、pp.188-191

【編集委員会付記】

この論文は、2001 年の編集委員会の査読を経て掲載可となっていたものの、第３号（冊子体）が発行されなかったため、公表に至らなかった論文である。本編集委員会は、合議の上、第３号（電子ジャーナル版）へ掲載可として本論文を受理することとした。この間、本来公表されるはずの研究成果が公表されず、投稿者が不利益を被る結果となり、ここに編集委員会として お詫び申し上げる次第である。